

【研究のまとめ】

1 研究授業における成果と課題（○・・・成果、●・・・課題）

主に「本研究授業の提案について」に関する成果と課題を、各学年で実施された2回の研究授業の反省を基にしてまとめた。

（1）1年算数科

①1回目の授業

- 「ちがいは」ということを理解させるために、絵を動かしながら視覚的に捉えさせたことは、マッチングしたものを取り去ったあとの残りが「ちがいは」になるということを理解させる上で有効であった。
- 書画カメラを使ってブロック操作を皆に示したことは、視覚的に捉えさせる上で有効であった。
- 求差と求残の違いをどのように捉えさせるか、教師側がしっかりと整理してから提示する必要がある。
- ブロック操作では求残の時のやり方をそのまま転用して求差の操作を行った児童が多かった。計算の意味と操作の意味を一致させるための支援が必要であった。

②2回目の授業

- ワークシート上でブロック操作をすることで、どのブロックをどう動かしたかが分かり、児童の思考を補助する上で有効であった。
- ブロック操作によって考えた計算の仕方をワークシートに書かせることで、思考の過程を可視化することができた。児童が自分の考えを確認したり、教師が見取ったりする上で有効であった。
- ペア学習で説明する段階において、ワークシートを用いて説明することが難しい児童も見られた。ブロック操作を併用するなどの配慮が必要であった。

（2）2年国語科

①1回目の授業

- 次時でワークシートの内容をまとめたり貼る位置を移動したりすることを考え、欄に合わせた付箋を準備した。それにより、児童はワークシートのどこに書いたらよいか迷わずに気付いたことから付箋に書くことができた。
- プリントを活用して印を付けたり線を引いたりする様子はあまり見られず、すぐに付箋に違いを書く児童が多かった。新たな気づきを促す上では、全体及び机間指導でもう一度本文に戻って考えさせることも必要であった。
- 読み取ったり気付いたりしたことを交流する展開を授業の中に位置付け、多様な見方ができるとに気付かせるようにした。友達の考えを聞いて自分の考えとの共通点や相違点、自分では気付かなかった点などに触れて考えを深めることができた。

②2回目の授業

- 写真や挿絵と本文を結び付けながら大事な言葉や事柄の順序に気を付けるために、ワークシートや付箋を活用した。事柄ごとに形式を統一したワークシートを使用したことにより、子どもたちは順序を書く欄や付箋を貼る欄で迷うことなく取り組むことができた。
- 読み取ったり気付いたりしたことを交流する展開を授業の中に位置付けた。多様な見方ができるとに気付かせるように全体での話し合いを行ったことで意見の交流ができた。
- 子どもたちがワークシートや付箋に書き込む時間が予想以上にかかり、ペア学習を省略した。作業量と時間配分について配慮する必要がある。

(3) 3年理科

①1回目の授業

- 観察前の予想と観察の結果、そしてそこから導き出される自分の考えを、一連の流れとして見ることができるようワークシートを工夫した。その結果、予想と結果を比べて自分の考えを整理させ、分かったことを書くことができた。
- 各グループでの結果を、教師側であらかじめ模造紙にまとめておいて提示し、児童の考える時間が十分に確保できるようにした。自分のグループの結果と比べて、同じことが他のグループの結果からも言えるかどうか考える上で有効であった。
- データ量が多く、数字の羅列になってしまったことから、混乱し表の見方がよく分からないままの児童も見られた。また、話し合いの際のグループの人数が多く、一人一人が十分に再考することはできていなかった。

②2回目の授業

- 能動的に実験に取り組めるように、予想を立てる時間を十分に確保した。子どもたちは、粘土を実際に手に取り、自分なりにいろいろと試しながら予想を立てたり、グループ内で自然に話し合いがされたりしていた。早く実験して確かめたい様子も見られ、有効であった。
- 予想の理由を書く部分で迷っていた子どもが多くいた。実験が単に当たり外れを確かめるものにならないようにするために、自分なりの理由をしっかりと書かせる必要があった。
- 一人一人の気づきをより確かなものにするために、児童のつぶやきを機を逃さずに取り上げた。別な表現に置き換えたり考え直させたりしてしっかり再考させるなど、授業の中でどう対応していいかが、課題である。

(4) 4年社会科

①1回目の授業

- 水に関する子供たちの疑問から学習課題づくりに取り組ませたいと考え、そのための資料として水に関わる写真を準備した。子どもたちはこれらの写真を手がかりに水に関わる疑問をいろいろ考えることができた。
- 一人一人がカードに書いた知りたいことを発表し、類似している考えがある場合はまとめさせた。全員が終わった後に、集まった情報の共通点を考えタイトルを付けさせた。この手法は、学習問題を設定する上で有効であった。
- 個人の疑問点のカード記入に時間をかけ過ぎたために学習課題のタイトル付けが教師主導になってしまい、根拠を伝える話し合いの時間を十分にとれなかった。指導過程の時間配分に配慮する必要がある。

②2回目の授業

- ごみ減量について考えるきっかけにするために、仙台市の人口とごみの量の推移についてのグラフを提示した。一見矛盾する二つのグラフを提示することで児童に問題意識を持たせることができた。
- 既製のグラフではなく、児童に考えさせるポイントを絞った自作のグラフを提示することで、より児童の問題意識は高まったのではないかと考えられる。
- グループで集まった情報を、全体場で発表しながら集約したが、教師主導で振り分けてしまった。疑問点は子どもに返し、子どもたちに議論させる場を持つことが必要であった。

(5) 5年総合的な学習の時間

①1回目の授業

- 食材について調べたりゲストティーチャーから聞いたりしたことを整理するために、食材グルー

ぶごとに色分けした付箋を活用してグループごとに話し合い、食材が違っていても共通する事柄ごとにまとめさせた。まとめた後に、どのような共通点なのかタイトルを付けさせた。食材の命をいただいていることに気付くことができた。

- 付箋を活用することは、グループでの話し合いで全員が根拠を持って伝えることができ有効であった。また、食材ごとに付箋の色を違えたことも、「食材が違っていても共通している」ことが視覚的に捉えられ有効であった。
- 短時間で付箋の内容が把握できれば更に話し合いが深められたと考えられる。前時での付箋記入の際に、「短い言葉で書く」という指示や、枚数を制限することが必要だった。

②2回目の授業

- 白菜の値段を生産者や消費者等の立場で設定するロールプレイングを行った。取引の値段は生産者が決めるわけではないことを知り、生産者を守る大切さをより実感することができた。
- 値段を決める要素をどこまで考慮すればよいのか判然としないところもあり、根拠として曖昧になってしまうところもあった。

(6) 6年社会科

①1回目の授業

- 発問と補助資料によって資料を読み取る視点を明確にすることを試みた。読み取らせたい内容について多様な考えを付箋に書くことができた。
- 各グループで話し合いを行ったが、その内容を全体に広げることができなかった。ねらいに迫る意見を把握した時に教師がつぶやいて価値付けたり、発表の場面で意図的指名をしたりすることで、読み取ったことを焦点化してクラス全体で思考を深めていけるような工夫が必要だった。
- 付箋の色を利用して「見つけたこと→そこから考えたこと」に分けることで、個人で思考する手だてとするとともに、考えたことを比較しやすいようにした。一人一人が考えたことを書き残すことで、グループの中で多様な考えを可視化することができた。

②2回目の授業

- 4つの社会問題を1枚のワークシートで比較できるようにしたことで、社会問題解決の共通項を考えさせることができた。
- ワークシートを予習で取り組むことによって、授業の中で共通項について考え、伝え合う時間を十分に確保することができた。
- 民主主義についてより深く考えられるようにするために自分なりに価値観をする場面を設けた。「タイムスリップをして問題を解決するとしたら、どの運動に参加するか」という活動を、授業の終末に取り入れた。今の自分の問題意識と本時で学習した社会問題を結び付けて再考している児童が見られた。
- 児童同士で意見を伝え合う活動を取り入れることができず、一部の児童の考えしか共有することができなかった。意見交流の場面を設けることで、より多様な考えに触れさせる必要があった。

(7) あすなろ生活単元学習

①1回目の授業

- 買い物をするうえで必要な「話す」「読む」「計算する」などの活動を楽しく行うことができるように、児童の興味・関心の高い「食べる」「遊ぶ」ことを活動の終末に取り入れた。字を読むこと・書くことやお金の計算などを、目的を持って取り組むことができた。
- どの児童も安心して学習に参加できるように、買い物をするときの話し方を提示した。教師側が

話し方の流れに沿ってモデルを示したりしたことは、視覚が優位な児童にとって効果的で、具体的なイメージを持たせることができた。

②2回目の授業

- 学習に見通しを持ち、主体的に取り組むために、単元計画書の提示、VTRや写真の活用、パフェの模型作りを取り入れた。見通しを持って活動することができたため、児童はスムーズに単元の学習を進めることができた。
- どの児童も友達の発表を聞き自分の気持ちを伝えることができるように、「おいしそう」「いいね」カードを活用した。カードを使うことで友達に気持ちを伝えようという意欲が高まり、活発に交流することができた。

2 研究の方法について

(1) 授業研究のシステム化について

- 年度当初に「研究授業の年間計画を立て、毎週研修日に「研究授業」、「検討会」(30分)、「模擬授業」(30分)を実施することで、研究授業を日常的に実施することができた。
- 討論会と模擬授業の合計時間が1時間を越えてしまうことが多かった。模擬授業本来の意図に立ち返り、できるだけ説明を省き、児童目線での意見が言えるようにすることで、時間も短く行うことができると考える。
- 研究のまとめは、1～2週間後までに執筆する計画だったが、行事などによって期限通りにいかないことが多かった。記憶に新しいうちにまとめることで、よりの確な反省を行うことができると思う。
- 昨年度に引き続き、研究授業の学習指導案をA4版2枚にまとめ、目指す児童像へ向けての「提案」を明記して取り組んだ。それぞれが研究に即した目的意識を持って授業をおこなうことができた。
- 学習指導案に教師個人の「授業技術課題」を明記することで、一人一人の教師が授業技術を高める努力をし、成果を上げた。
- 「授業技術課題」の中に「本授業の提案」や「言語活動」と重複する内容も見られた。どの項目にどのような内容を書くのか、それぞれの項目ごとの整理と共通理解が必要であると感じた。
- 昨年度に引き続き模擬授業の前に学年部で指導案検討を行った。単元・教材などの妥当性や提案の具体性などについての話し合いを持つことにより、多くの授業でテーマに迫る内容の提案ができた。

(2) 共通の取組と授業研究の取組について

① 「東二小版 説明・話し合い名人」の作成・実践

- 昨年度に引き続き活用し、目指す児童像を意識しながら日常的に指導することができた。
- 話し合いの最終的な児童像は、話型にとらわれずに自分の言葉で話す姿である。集会活動や学校行事のさまざまな場面で今後も指導を続けて行きたい。

② スピーチや音読の重視

- 朝の会等でスピーチを取り入れたり、養賢学習や授業で音読・朗読・暗唱をさせたりすることで、自信を持って話す児童が増えている。
- 説明し合ったり、話し合ったりする活動において、自分の考えに自信が持てずに、発言できない児童への手だてを今後も継続指導していく必要がある。

③ お話朝会の活用

- 継続的に行ってきていることもあり、ポイントを押さえた聞き方が徐々に身に付いてきた。
- 児童に五分間で箇条書きさせるためのワークシートを作成して、よりポイントを明確にした書き方を指導することができた。
- プレゼンテーションソフトを使わずに、話しを聞くことに集中させることも重要だと言う意見が出された。その際、教師側が話の内容を簡潔にまとめ、理解しやすい話し方を心掛ける配慮が必要になるであろう。

3 研究のまとめ

今年度は、昨年度に引き続き「進んで伝え合い学び合う児童の育成」を目指して、研究・実践を積み重ねてきた。サブテーマも昨年度同様「思考を深める手だての工夫を通して」に設定し、継続して思考することを焦点化した研究を行った。その結果、低学年では、ワークシートや付箋などを活用して情報を整理したり、自分の考えを分類してまとめたり説明したりすることができるようになった。また、友達との関わりの中で自分の考えを広げたりすることができる児童も増えてきた。中学年では、グループで意見交流の場を設け、友達の意見と比較し違いに気付いたり、それに対する自分の考えを発表したり、修正したりすることができるようになってきた。高学年では、資料を関連付けて考えたり、調べたことや経験を基に自分の意見を持って話し合ったりすることができるようになってきた。

また、学年ごとに思考深めるためにどのような手だてが必要かを吟味しながら指導を行ってきた。

(別紙・・・表1) 発達段階に応じてどのような手だてが有効であるか、どのような学習場面でどのような手だてが有効であるかを明らかにすることができたのは、研究の大きな成果の一つである。

今年度目指してきた「思考を深める手だての工夫」は3年目の取組である。今年度は各学年の研究計画を立案する際、実施する教科の指導要領から思考に関する部分を抽出し、教科の目標とどのように関連付けたらよいかをあらかじめ明記した。その結果、実施した今日は複数に及んだが、教科本来のねらいにせまる授業を提案することができた。さらに、昨年度に引き続き学年部で模擬授業の前に指導案の事前検討会を設け、よりテーマに迫る提案を追究してきた。その結果、どの授業も研究のねらいに沿って実施することができた。

「伝え合い学び合う児童」を育てるためには、思考と表現のそのどちらをも充実させることが大切である。本研究テーマとサブテーマの実践は今年度で一区切りとなるが、今後も学校生活や学習指導の様々な場面で、これまで培ってきた児童の表現力に加え、一人一人の思考が整理され、交流しながら深められるための手だてを工夫しながら行っていきたい。